

# 願成寺報

四令和年十一月二十三日

〒四四〇・〇八一二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

## 報恩講のご案内

昨年と同様に、感染対策をして勤めます。

- ・暖房を強力にして、窓などにて換気します
  - ・お参りの際はマスクの着用を願います
  - ・堂内三〇名の人数制限の場合あり
  - ・事前にご連絡いただければ席を確保します
  - ・お齋（昼食）と雅楽は中止します
- 午前・午後共お参りで昼食にお困りの方は  
ご相談下さい

真宗寺院で最も大切な行事です。



十二月 土 齋 午後一時 餅つき 草取り 余

十二月 三(土) 午後一時半 法要・法話 岡崎市浄泉寺 戸田 栄信 師

午後三時半 お齋(善哉)

午後四時 法要・法話



四(日) 午前十時 法要・法話 西川 舜優 師

午後一時半 講談のような説話説教

午前十一時 お齋(昼食)



## 「善悪」を超える

弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとするべし。そのゆゑは、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと云々。

〈歎異抄・第一条〉

善いことをすれば好かれるし、悪いことをすれば嫌われる。

逆に云うと、他人の評価が、私の善悪の基準になっています。

恋人だけには嫌われたくない…等と考えると判断の対象が限定的となり、もつと多くの人から嫌われるようなことを起こしてしまいます。

状況によって人々の捉え方が変わって、善悪がひっくり返ることも茶飯事です。

だから善悪に囚われていると生き方がブレてしまいます。

裁判官のように他人を評価するとギスギスします。

成功が善で、失敗は悪。けれど、その失敗が成功を導くかもしれません。

真面目に考えたら、迷惑を掛けてばかりで、悪でしか在り得ないような私。

そんな私をも嫌わず、微笑んで「頑張れ」と励まして下さるはたらきが本願です。その功德を感じれば、例えば絶望の中の私でも、それ活かす道が拓かれます。

念仏に歩まれた方々の姿の中に、その事実が実証されています。

## ● 阿弥陀経ノート ⑦ 正宗分・勸念仏往生

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

また舍利弗、極楽国土に衆生生まるゝ者は、皆これ阿毘跋致なり。その中に多く一生補処あり。その数甚だ多し。これ算数の能く之を知る所に非ず。但無量無辺阿僧祇劫を以て説くべし。

舍利弗、衆生聞かん者は应当に発願し、彼の国に生れんと願うべし。所以は何。是の如きの諸の上善人と俱に一処に会うことを得ればなり。

舍利弗、少善根福德の因縁を以ては、彼の国に生るゝことを得べからず。

〈仏説阿弥陀経・書き下し〉

・衆生生者 この段落を極楽往生後（果位）／往生前（因位）のどちらで読むか議論がある。けれど、弥陀の功德が生死の境を超えさせるものであれば、往生を目指す者（因位）の姿としてよいか。

・阿毘跋致 自利利他を行わずの菩薩道にある上級階位の一つ。

・一生補処 仏の働きを補う処、菩薩道の最高位（等正覚）。  
利他（衆生利益）の為に成仏を留まった菩薩（還相の菩薩）。  
衆生を導く化仏のはたらきをする者

・無量無辺… 人知の想像を絶して余る程の数。  
宇宙の歴史と拡がりを感じさせる文言。

・上善人 相対的な善人でなく、右記の菩薩など、私を導き育てる者。すでに別れた人をも含む。

・俱会一処 一処は極楽浄土。自他を超えて「大悲のいのち」となる再会。その再会を前提にすると、全ての縁が慈しまれてくるか…

・少善根福… 仏の功德を知らず、現世を嫌い、来世を求めた諸々の善行。相対的な善恵の基準に囚われてする、自力の修行。

・廻向される自利利他

「死んだら星になる」は、生きた姿が人々を照らし続けるという意味で、絶妙な表現だと思う。けれど星にも明るさの等級や色等いろいろあって、時には逆説的に輝くこともあるだろう。私としては、北極星のように有益に輝く星となり、褒められたいが、この思いが既に迷いの始まりなのかも知れない。とすれば、利他を行うことも、それを自利と喜ぶことも、「私」の限界を越えているのだと知られてくる。真の自利利他は如来から廻向されるものであり、私の手の内にはないのかも知れない。

では、私として、どの様に生きていたら良いのだろうか…

・他力の菩薩道とは

私には善に憧れ、悪を畏れる心がある。けれど、それは自己都合に汚染されていて、知覚しうる範囲も狭く相対的であり、真の善悪からは遠いと云わざるおえない。そんな善悪を生活の指針としても安定せず、人生航路は迷いの迷路に彷徨ってしまう。

だから、迷っても笑顔を忘れない生き方が大切なのだと思う。迷いを前提として、善悪を超えて見せる笑顔こそ、利他の姿なのだろう。

俱会一処の浄土を願い、浄土を背景とすれば、大きな悲しみや苦難の中でも笑顔になることが出来る。同じ境遇を過ごし、過ごし去った人を想った時に、自然にコワバリが解れる。他に利せられて（他利）仕上がった微笑みが、同じ境遇の人を利していく（利他）。他利と利他の間で、私が育てられていく。

それが他力の菩薩道だと思う。

・不退転の慶び

育ちゆく慶びの中で、私はもう悪を畏れない。失敗を重ねても、どんな境遇に至っても「平気で」生きてゆける。舍利弗には、そんな自信が漲っていた。

## 聖人が化仏と仰いだ人々

聖徳太子 574～621 「和国の教主」観音菩薩の化身」

用明天皇の子で、推古天皇時代の皇太子(摂政)。朝廷内での権力闘争の激しい時代に、仏教を基軸として、争いのない国作りを目指した(十七条憲法)。



寺院を多く建立し、法華経等深く学んだ(三経義疏)。後に太子信仰が広まり、聖人も尊崇された(十一首和讃)。

法然上人 1133～1212 「源空勢至善と示現し」あるいは弥陀と顕現す」



法然房源空上人。智慧第一の法然房と尊称された人。貴族(僧侶)民衆の隔たてなく、能力や資質も問わない、人々が平等に救われていく道、念仏の教えを説き広めた。日本浄土教の開祖(選択本願念仏集)。

恵信尼公 1182?～1268? 「六角堂の夢告」



聖人の妻で、来歴に諸説ある人(以下は畑龍英説に依る)。西本願寺に娘への手紙が残っており(恵信尼消息)、手紙には聖人を観音菩薩の化身と見た夢が記されている。聖人に法然を紹介し、百日の六角堂参籠を支えた。聖人は救世観音の夢告を得て、恵信尼を生涯の妻とした。

いなかの入々 越後国流罪以降



聖人は京都の中流貴族に生まれて、比叡山で修業した。民衆の暮らしは、山の修行に比しても厳しかった。工夫しながら自然と闘う生活の中に念仏の音が響く。愚鈍の身になって、ただ一向に念仏すべし(一枚起請文)。法然上人の遺訓が姿となっている。その姿を化仏と仰がなかった筈はないと私は思う。

## 聖徳太子と親鸞聖人は仏々想念

聖徳太子は、我が国の文化の創始者であり、その文化の中心には、常に仏教精神を据えて、国民の心をまとめていこうとされました。

憲法十七条の制定は、その精神の最たるものです。第一条の「和を以て貴しとなす」も、第二条の「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」も、そして第十条の「われ必ずしも聖にあらず、かれ必ずしも愚にあらず、ともに是れ凡夫ならくのみ」もすべて仏の教えに依っての平和思想であります。

こうした平和への願いは、一四〇〇年後の今日に至るまで、それぞれの時代の人々の心を潤してきました。

鎌倉時代初期に出られた親鸞聖人は、その日ぐらしをしている庶民こそが救われなければ、真のほとけの教えではないという立場でしたから、聖徳太子の教えがそのままほとけの教えであるといっただけだったのであります。だから聖人は、太子を「日本のお釈迦さまである」と褒め讃えられ、『皇太子聖徳奉讃』という(和讃までおつくりになりました)。

また聖人は、「ご自分の求道遍歴の中で、転機に立つたばに太子のご示現を仰がれた話は有名であります。そして、聖人は「太子のお導きがなかったら、真宗の教えもなかった」とまでおのべになっておられます。まさに仏々相念のお心であります。

私たち真宗のご縁にあうものは、この聖人の心を心として、太子を仰ぎ七高僧ともども御影を掲げて、お慕い申し上げるばかりであります。

高田本山・ひとくち法話 No.92 — 聖徳太子9 —



右は「高田本山」より転載しました。他にも掲載多数あり。「高田本山」で検索下さい。上は、当山本堂に掛かっている太子の尊像です。

## 行事予定（令和五年）

コロナ感染防止の為、昼食中止等、内容変更の場合もありますが、日時の変更はない予定です。

一月 一日（日・祝）	修正会 お正月のお勤めです 簡単なお節を準備します 午前十一時～
三月 二十一日（火・祝）	春季彼岸・永代経法会（成田屋紫蝶師） 落語と法話で楽しく過ごします お非時（昼食）あり 午前十時～、午後一時
八月 十五日（火）	お盆・歓喜会（住職） 法要・法話で亡き人を偲びます 軽食・花火あり 午後六時～
九月 二十四日（日）	秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信師） お馴染みの先生の情熱的な法話です お非時（昼食）あり 午前十時～、午後一時
十一月 三日（金・祝）	本山納骨堂法会・団体参拝 本山へ貸切りバスにて団体参拝します 午前六時半ごろ集合
十二月 九日（土）	報恩講
十二月 十日（日）	御開山聖人御恩に報いる法会です 二日目のみお非時（昼食）あり 一日目 午後一時半～ 二日目 午前十時、午後一時半～
二～十二月 毎月一日	月例会 毎月一日 午後二時～ 日時変更の場合があります 寺にご確認下さい

## 本山の特別法要ご案内



開山親鸞聖人御誕生八百五十年

立教開宗八百年

中興真慧上人五百年忌

聖徳太子千四百年忌

法要テーマ

弥陀のよび声『なもあみだぶつ』を  
聞いてゆこう

期間

令和五年五月二十一日（日）～二十八日（日）  
勤行は午前十一時～

本山が長く準備してきた五十年に一度の勝縁です、特別講演や各種イベント等も企画されています、是非お参り下さい。コロナの状況が良ければ、団体参拝も企画します。ご期待下さい。

## その後記

○お坊さんは儀式用に中啓という扇子のような物を持ちます。開かないように紐で縛ってあって、本来の用途は判りません。

座るときには、この先端を畳につけて柄を落とします。小さな衝撃が伝わって近くの虫たちが逃げるので、不用意な殺生を防ぎます。

急に寒くなり、虫たちは長く鳴けませんでした。地球温暖化が原因だとすれば、知らずに多くのいのちに迷惑をかけている事になります。

寺では、秋の樹木消毒をしましたが、植栽を護る為とはいえ、これも虫たちには大迷惑だったと思います。

森は、多様な動植物が、競争もするけれど、化学物質等を交換し合いながら共生しているのだそうです（NEKUNO）。其々は共生など意識せず勝手な活動をしているのに、全体として共生を構成しているらしい。

そんな森の神秘に接して、何故だろう…救われた気持ちになりました。

